

論文審査の結果の要旨

平成27年7月29日

氏名： 鄭 穎

論文題目： 牛島春子研究 ―「満洲」は彼女にどう作用したか。

鄭穎氏の博士論文「牛島春子研究「満洲」は彼女にどう作用したか」は、近年、研究が急速に進展している満洲文学を研究テーマに据え、満洲文学を代表する女性作家牛島春子の文学と軌跡を、歴史的背景、伝記的諸事実、作品分析、中国における受容などの多面的考察によって解明した重要な試みである。先行研究の精査を踏まえ、中国と日本の図書館などの数次に及ぶ丹念な調査を行い、牛島の根幹にかかわる第一次資料を発掘し、牛島春子研究の基盤を深化させ、さらにこれらに基づき新たな牛島春子像の構築を試みた意義は大きい。牛島春子研究、昭和文学研究ばかりではなく、近代日中文化比較研究においても貢献著しい論文であることは疑いないところである。

本論文二部構成のうち第Ⅰ部「日本女性と「満洲」」では、牛島以外の複数の日中女性作家に言及し、研究に奥行と深みを与えている。第Ⅱ部「「満洲」に根ざした牛島春子を中心とする考察」では、第一章で、年譜の訂正、性意識について、野田宇太郎、川端康成との交流、転向問題を論じている。第二章では牛島の代表作「祝といふ男」論、「苦力」論が卓越している。第三章は本論文の独壇場ともいふべきところで、執筆者自身が発掘した新資料に基づき、「祝といふ男」「王属官」の中国語訳と原作とを比較検討し、文学における日本と満洲の交流・緊張・齟齬を植民地関係の力学の中に浮き彫りにしている。現在、学界で注目されている諸テーマに向き合い、サイドのオリエンタリズム理論、バーバの「擬態」など、最新の理論を用いて分析しているもので、「外地文学」「植民地文学研究」に寄与するものとして高く評価できる。対応する日本語版がまだ見つかっていない、筆者発掘の「遙遠的讯息(遠くからの便り)」に関する論は太平洋戦争下の牛島の「再転向」を論じ注目される。デビュー作「王属官」の小説、劇、映画、マンガなどの植民地下の翻訳及びジャンル・メディア移行を論じた画期的な分析など、独創的な新見に満ちている。

本論文は、牛島春子研究、植民地文化研究、昭和文学研究に寄与する論文であり、方法的にも最新の研究方法・視点が駆使されており、今後、この横断的領域での必見の文献として参照されていくものと考えられる。全体として、戦前・戦中・戦後、歴史的転換期に「満洲」に身を置いたことが、牛島春子に何をもたらし、それが昭和文学史にどのように寄与したか、伝記と作品の両面を追究し、「満洲文学」の意義と可能性を解き明かそうとして所期の成果を収めている。

筆者は大連科技大学の教員として、日中連携大学院博士課程に入学、常に学術に心魂を打ち込み、精励し、その成果を今日の博士論文に結実させたものである。すでに学術誌(未刊行も含む)に六本の論文掲載をしており、研究者としても実績があるが、今回の

学位論文により、いっそう鄭穎氏の学術面での影響力はいっそう高まるものと期待される

以上、審査員全員により、本論文が博士号授与に値する論文として重要な業績であるということが確認された。日本文学、日中比較文学研究の若手の研究者として今後の活躍を囑望したい。

主査： 人文科学研究科 北田 幸恵

副査： 人文科学研究科 三木 紀人

副査： 人文科学研究科 小林 富久子

副査： ビジネスデザイン研究科 袁 福之

副査： 大連外国語大学 劉 利国